

# 古地図に顕れる朝鮮初の自国認識

「混一疆理歴代国都之図」<sup>1)</sup>を通じて－

権 静\*

(e-mail : shirijung@hanmail.net)

---

## 目 次

---

- 第一節 問題提起
  - 第二節 「混一疆理歴代国都之図」の特徴
  - 第三節 高麗の主体性模索
  - 第四節 結論
- 

## 第一節 問題提起

「混一疆理歴代国都之図」は1402年（朝鮮太宗2年）に制作されたものであり、現在は日本の竜谷大学に保管されている。（以下、便宜のため「竜谷図」とする）その日本への伝来については1592年の文禄の役（壬辰戦争）後に豊富秀吉が西本願寺に下賜したという説と、大谷光端が明治初年に購入し持ち帰ったという説がある<sup>2)</sup>。「竜谷図」の他にも天理図書館所蔵のもの、島原市の本光寺所蔵のもの、熊本市本妙寺所蔵のものがあるが、「天理図」と「本妙寺図」は名称も跋文も欠落しており「竜谷図」・「本光寺図」に遠く及ばないものである。地図の性格を明確にするために、これらの地図がどのような系統の上に成立しているのか、「竜谷図」が示す特徴とその他の地図との関連を通じて考察していきたい。そのためにまずそれらの地図が現わす類似点及び差異点を各々見ていくことにする。

---

\* 培材大学 教養教育

1) 本地図は日本の古地図である「五天竺図」に対する考察（「古地図に顕れる日本の世界観」, 『日本文化学報』第13輯）の後、その比較対象として検討されたものである。

2) 秋岡武次郎『日本地図作成史』鹿島研究所出版社、1971年、p.178。

①「竜谷図」は縦171cm、横164cmの大幅の地図で絹に描かれた彩色写本である。中国の都市は赤色で彩色され、省都は円形で普通都市は四角形で表記されている。河川と淡水湖は青色に海と鹹湖は緑色に彩色されている。この着色法はアラビアの地球儀のそれと一致しており、アラビア系の地図の影響を受けていることを示唆している<sup>3)</sup>。地図の輪郭を見ると中国と韓半島の河川と島嶼が詳細に記入されている。

日本の場合には方位が間違っているが、本州と九州の形は比較的正確に記されている。アフリカとアラビア半島はその大きさにおいては、実際より小さく表記されているが、形は実物と類似している。

それに比べ印度半島は半島で表記されていず、単に海岸線で現わされているにとどまっている。下段には権近の跋文が記載されており、「竜谷図」の由来とその特徴を詳細に示している。この跋文によると、「竜谷図」は朝鮮<sup>4)</sup>の高官、金士衡が1399年に明国から持ち帰った二枚の地図、即ち李沢民の「声教広被図」と清濬の「混一疆理図」を合成し、更に李蒼の作成した「八道地図」と朝鮮の日本通信官、朴惇之が1393年持ち帰った「行基図」を補入して完成させたものである。「竜谷図」に収まっている領域は韓半島、日本、中国は勿論のことアラブ世界を中心にヨーロッパ、アフリカまでにも広がっており、15世紀に於いては最も広範な世界地図であった。

②「大明国図」は天理図書館に所蔵されており、この地図に関しては海野一隆の「天理図書館所蔵大明国図について」<sup>5)</sup>という論文に詳しい。この論文で彼は地図の中央に大きく広がる中国と、その右方の韓半島や、印度半島を欠いた中国西方の陸地の表現から、この地図が明らかに「竜谷図」の系統であることが分かると述べている。殊に西アジア以西の陸地の輪郭や河流など全く同一といえる。ただ「竜谷図」では図端により切られていたアジアの北部が、ほぼ直線に近い平滑な海岸線で縁取られているため、四周に海を巡らす一大陸という印象を強く与える。このほか「竜谷図」で倒立していた日本がほぼ正しく描かれ、大陸南方海中の地名が遥かに多いことなどが一見して分かる相違点である。また「竜谷図」が海岸・塩湖を緑色に、河流・淡水湖を青色に塗ることは、アラビア地図の影響を受けた点として小川琢治博士が指摘されたが、この図は河川・湖沢・海洋など水域の部分で淡緑に彩る。ただ例外として黄河を黄土色、中国四方を南流する黒水と考えられる大河を青色で彩飾している。この図の概観は、縦135cm横174cmの絹地に描かれた淡彩の筆写図で、残念なことに題名と年紀、筆写名が記されていないため、図の歴来に付いては何も知られていない。ただ記されている中国の地名が1476年から1524年の明代中期のものであるため、この時代のもつと推測される。

③「本光寺図」は1988年、長崎県の本光寺で発見されたもので、題名、跋

3) 小川琢治『支那歴史地理研究』、弘文堂書房、1928年、p. 6。

4) 朝鮮は古朝鮮や朝鮮時代を指す場合に、韓半島は地理的な意味合いが強い時に使用する。

5) 『大阪学芸大学紀要』6号、1958年。

文、描かれた領域いずれを見ても「竜谷図」とほぼ同一の地図といえる。この地図に付いての説明は弘中芳男氏の「島原市本光寺蔵混一疆理歴代国都地図」『地図』27巻4号（日本国際地図学会、1989年）に詳しい。この論文によるとこの図の概観は縦220cm、横280cmと、「竜谷図」のそれよりかなり大きいサイズで、また「竜谷図」が絹地に描かれているのに比べて、この図は分厚い和紙に描かれている。彩色法は海、湖、河ともに青く着色されていて、「竜谷図」のような緑色は使用されていない。その他の差異点は日本列島の位置が「竜谷図」と違い正しく記されていることである。注目されるべき点はこの図が「竜谷図」の他には唯一権近の跋文が載せられているということと、「混一疆理歴代国都地図」という「竜谷図」のそれと酷似している題名が記入されていることである。

このことから「竜谷図」と「本光寺図」が同一の系統に属し、親密な関係を有することが窺い知れる。

④「本妙寺図」については海野一隆の前掲書に詳しい。この図は「天理図」と同一の図形・内容を示しており、「天理図」の姉妹図と見られる。その概観は縦169.6cm・横136.3cmの紙地で、「天理図」の彩色よりかなり淡白な色合いを持つ。この「本妙寺図」は寺伝によると、1592年の正月に朝鮮の役に際して秀吉から清正に戦略と共に授けられたものとされている。

以上、四つの類似図を考察してきたが、「竜谷図」・「本光寺図」がその題名と跋文の類似性から緊密な関係を有すること、「天理図」・「本妙寺図」が全体の陸地を海で囲む形で描いていることから同一系の地図であることが分かる。だが「天理図」が「竜谷図」の影響の下で制作されたことは上でも述べた通りであり、それを考慮するとこの四つの図は元々同一の地図を元祖としていたと思われる。これらの地図は1402年に描かれた原図をもとに幾度もの写生を経て今の形になったものと考えられる。

一方、韓国で現在目にすることができる「竜谷図」系の地図は最近日本から購入された仁村記念館所蔵の「混一歴代国都疆理地図」と、題名が欠如している奎章閣本、そして『韓国の古地図』（凡友社、1991年）という資料集に載っている「竜谷図」の複写本が全部である。仁村記念館所蔵の図は『韓国の古地図』に掲載されているが、この図は「竜谷図」のように中央アジアの西側にヨーロッパ・アフリカ・印度を描いておらず、世界地図としての性格を欠き、中国の万里長城と黄河源を西側の限界とし、遼東半島を東側の限界としている。つまり明代の勢力範囲においての中国・韓半島・日本を表記している。また製作年代は明代の地名から1526年から1549年の間のものと考えられる。同書で奎章閣本についての説明はなされていないが、題名を欠いていることから仁村記念館所蔵の図より優れているとは言えない。

このような状況のもと、現在日本と韓国で同時に見られ、題名と権近の跋文両方を載せているものは「竜谷図」を複写したものであり、そのためこの論文では「竜谷図」をもとに検索を進めてゆくことにする。

「竜谷図」は上記したように、その当時のものとしては最も精巧かつ詳細な世界地図であった。むろん現代の意味での正確さには欠けおり、例えば日本図は「行基図」をもとにしているが、その位置は南を北端にし実際の位置とは逆に描かれている。

最初にこの地図に関する先行研究を簡略に紹介することにする。「竜谷図」に関する研究は実物が韓国に現存しないことも理由となって韓国ではそれほど活発化されておらず日本での研究が主要を占めている。その中でも代表的なものとしては青山定雄「シナにおける歴史地理研究の変遷」『歴史学研究』3（1935年）、海野一隆「天理大図書館所蔵大明国図について」『大阪学芸大学紀要』（1957年）、高橋正「東漸せる中世イスラム世界図」『竜谷大学論集』（1963年）などを挙げるができる。これらの論文で扱っている「混一強理歴代国都之図」は竜谷大学所蔵のものに限らないことをまず断っておく。

青山は上記の論文で、この地図が世界図であることに注目しており、当時の中国の地図にも優るものであることを強調している。

海野は天理図書館所蔵の地図に「扶桑山」・「崑崙山」などの表記があることから神仙説と、この地図を関連させている。

高橋は地図の着色法に注目し、この色使いがアラビア地球儀の着色法と同一であること、それにイベリア半島・北アフリカ・西南アジア地方に示された漢字地名がアラビア語またはペルシア現地語を漢字で音訳したことを明らかにし、中世にイスラム文化の影響が東漸していることを立証している。

これらの研究に対して韓国での主な研究は金相運「李朝初期の地理学と地図」『ソウル大学教育大学院』（1971年）、金良善「韓国古地図研究抄」『崇実大学』（1965年）、張保雄「李朝初期15世紀において制作された地図に関する研究」『地理科学』（1972年）のものがある。

金相運はこの論文で主に高橋の意見を収斂しているが、彼の視点の特徴は地図に韓半島を大きく書き過ぎていて地図の均衡が取れていないと主張していることである。私見では古地図に現代の地図の基準を当てはめ、正確さで地図の価値を論じること自体、再考すべきことであり問題は韓半島の大きさが何故、実大より誇張されているのかに焦点を当て検索すべきだと思う。

金良善は韓半島が常に外からの侵略に悩まされてきたことを考慮し、国防の必要から地図を制作したとしている。また「妙香山」の表記の特殊さについても言及しているが、それがどのような意味を示すのかにまで踏み込んだ説明はされていない。

張保雄は以上で述べられた意見を大筋受けついているが（元朝のアラビア地理学の伝来、韓半島を意図的に拡大したこと、妙香山の表記の特徴、国防のために作成されたことなど）彼の意見としては比較的正確なこの地図が引き続き発展されず、想像的・非科学的な「天下図」が同時に世界地図として広く普及していたのは地理学の後退と述べている

ことである。果たしてそうなのだろうか。私見としては「混一疆理歴代国都之図」・「天地図」はそれぞれ異なった世界像を顕わしているものであり、同じ基準で論じるべき性格のものではないと思う。「天下図」については以前、同誌に発表したものがある。

以上、先行研究を見ると各々異なることに焦点を当て研究を行なっているが、その時代の世界観と地図とを関連させた研究はまだされていない。このような視点で地図を読むことも必要とされているのではないか。

## 第二節 「混一疆理歴代国都之図」の特徴

「竜谷図」を見ると、かつて中国を世界の中心と捉えその他の国を皆夷狄としていた頃とは異なった目で世界を捉えていることが分かる。世界に対する視野が広く西洋までにも開けており、その中で韓半島を位置づけている。ここで注目すべきことは韓半島が他の国と比べ実際より誇張され大きく描かれているということである。地図という空間に自国をおおきく描くことによって、それだけ強い存在感を見る側に与えることが可能であり、またそれによって韓半島がどの国にも劣ることのない大国であることを示唆することができる。私達はこの地図を見ることによって、朝鮮初の韓国が自国をどのように位置づけていたのかを窺い知ることができるのである。さらにこの図は「妙香山」と名づけられた山だけを他の山とは違う方法で表記している。

他の山は、ただ線をジグザグに走らせて表記されているが、「妙香山」だけは山形で記されている。それは何を意味するのか。崔南善の「東国地名事典」を見ると「太伯山」という項目に「妙香山」の説明がされている。それからこの山は朝鮮の建国神話の舞台であり、朝鮮の祖先として崇められている檀君の誕生地であることが分かる。当時の「妙香山」に対する認識が他の山に対するものとは異なっていたこと、「妙香山」が神聖視されていたことなどを考慮する時、何故「妙香山」だけが特別な表記で他の山と区別されていたかを納得することができる。

「妙香山」と建国神としての檀君を結びつけて考えることは何も特異なことではない。檀君神話については13世紀になって頻繁に語られるようになり、それに関する書物も生み出されている。『帝王韻記』と『三国遺事』がそれである。

この二つの書にも檀君の父である桓因が「妙香山」に降臨して檀君を誕生させたとか書かれている。このように当時、「妙香山」は建国神である檀君の誕生地として捧められており、その「妙香山」を特記したことと自国を誇大に表記したことなどを合わせて考えると高麗時代の世界観が自ずから浮上してくる。韓半島は以前中国を世界の中心として、自らをその中華思想に組み込ませていたが、この図からはその秩序から脱却して自国をそれとは異な

る世界の中心として捉えていることが分かる。このような世界観はこの地図の下に跋文を書いた権近の存在を検索した時、より明確になる。

権近は、1352年（高麗、恭愍1年）から1409年（朝鮮、太宗9）までの時代を生きた学者（彼の文章力を見込んだ朝廷では公式な文章の作成をほとんど彼に頼んでいた）であり、また権臣（朝鮮の建国者である李成桂とは高麗期から緊密な関係であった）でもあった。彼の生きた時代は百余年間にかけて高麗及び世界を支配していた元が衰退し、その結果漢族が振興して新たに明を建設するなど国際秩序が多様に変化した時期で、恭愍王もモンゴルの元国に対し「反蒙政策」を積極的に実施していた。当然、権近もその政策の影響を蒙っていたものと思われる。彼は1396年（朝鮮太祖4年）に明に派遣されるが、そこで明の洪武帝に詩作を命じられる。その内容が彼の文集である『陽村集』（朝鮮史編集会編、1937年）に詳しく書かれている。

その詩では開闢の始めに東国に檀君が東夷の主として降臨し、その年代は中国の「三皇五帝」に当たる唐堯元年であると詠われている。この詩で権近が中国の祖神である「三皇五帝」に檀君を対比していることは注目すべき事実であり、中国に行つて祖国の建国神話を詠ったことも注視されるべきである。ここで彼は朝鮮が中国とは異なる神話の上に成立している国であることを強調したものと受け取れる。このように「竜谷図」の跋文を手がけた彼が檀君神話を常に意識していたことを考えると「竜谷図」での「妙香山」の特記は、この山が建国神話の背景を持つ神聖な山であることを強調するためのものだったということが分かる。

この地図が誕生するまでの国際状況がどのようなものだったのか。十一・十二世紀における東アジアの情勢はそれ以前とは一面をなすものであった。それは唐帝国が滅亡（907年）したことと、その結果北方民族の活動が強まったことに起因するものである。十世紀を基点に中国での唐帝国の滅亡に続き、韓半島では新羅王朝が衰え高麗王朝が誕生（936年）する。また蒙古・満州の方面では契丹が強大になって国を遼と号し日本では所謂、承平・天慶の乱と呼ばれる「平将門の乱」（935-940年）・「藤原純友の乱」（936-941年）によって律令体制が崩れ始める。このように十世紀は東アジア諸国が激動した時代であり、とくに北方民族の金は宋と高麗を圧倒し宋を南に追い込むに至る（1126年、金によって北宋が滅ぼされる）。このような北方民族の動きは十三世紀には蒙古に引き継がれ蒙古はアジアに止まらずヨーロッパまでにもその勢力を轟かす。東アジアの秩序は唐帝国が栄えていた頃とは全く異なるものへと変化していったのである。

ここではその波乱の時代を生きた高麗に焦点をあて、高麗の世界観というものがどのような様相を呈していたかについて考慮してゆくことにする。

『高麗史』によると高麗が建国された時（918年）、中国は未だに五代十国の混乱した時代であり、中国の中華思想は次第に名だけのものとなってしまい高麗は948年、光宗の時から後漢の年号である乾祐を捨て高麗の独自の年号である光徳を使用し始める。光

宗は独自の年号の使用に止まらず、自らを皇帝と称号し開京を皇都とした<sup>6)</sup>。だが960年、宋の建国により勢力を回復した中国は遼にも対抗できる力量を誇示し、このような状況に直面した光宗は962年12月に宋の太祖の年号である乾徳を使用、高麗の年号である峻豊の使用を中止する。このように中国と高麗は北方民族という共通の対抗相手が存在する限りはお互いに冊封関係を必要とし、それを利用して。相互依存関係は宋が女真族である金国によって南に追われ南宋となり、最終的にはモンゴル族の元によって滅ぼされる時まで継続されることになる。

この時期までの高麗は中国と密接な関係を保ち、自国の世界観を維持するにも中国の思想を以って成してきた。その例として、中国と高麗が金・元という強力な対抗すべき国家に共に直面した時、中国で誕生した「理気二元論」を挙げることができる。宋は北方民族である金・元の侵略に悩まされその結果、次第に南へと南へと移動せざるを得なかった。この時、南宋の朱熹によって現実克服の論理として中国の中世の民族主義といえる中華主義が創出される。それが「理気論」であり、理は不変の原理として恒久的に存在するが可変的な変化要因である気の作用によって変化するというものである。そのため「理」を中国に「気」を北方族に対比させた。これは中国が一時的に可変的である気の作用で北方民族に侵略されているが、実際は不変の理である中国が北方族より優越している存在であるということを強調したものと考えられる。この「理気論」は高麗においても積極的に需要されるが、その理由は中国と同様、北方族の金・元に侵略され終にその勢力下に置かれた状況から起因するものである。北方族に追われ南遷する南宋が中世の民族主義として「理気論」を創作したように、同じ立場に置かれた高麗でも金・元に対抗する思想として「理気論」を認識したのである。つまり宋文化の受容によって自らの世界像を守ったといえる<sup>7)</sup>。

だが、このようにいつまでも宋の「性理学」に依存して高麗の国家アイデンティティーを守護していくことは不可能であった。なぜならば南宋は1279年、終に元によって滅ぼされてしまい、中国の元による支配時代が始まるからである。宋の滅亡に向き合わざるをえなかった高麗はそれまでの「朱子学」とは異なる、国家アイデンティティーを担うべき新思想を創出しなければならなかった。南宋の崩壊と元の建国は、それまでの高麗の中国中心の世界像を覆してしまう大きな事件であった。高麗はこれを契機に自国独自の国家思想を探索し始める。

元が中国を支配し始める十三世紀において、李承休の『帝王韻記』・一然の『三国遺事』がこの世に誕生することは偶然によるものではない。この二書がそれまでの書と異なるのは、儒教思想から起因する「怪力乱神」は語らないという叙述態度から脱却し、民

6) 『高麗史』古典研究室編纂、1992年、巻1、世家 第2。

7) 鄭玉子『韓国史特議』ソウル大学出版、1990年、p.360。

族の共通始祖として積極的に「檀君神話」を取り入れていくところである。十三世紀に入ってモンゴルの侵入を経験することによって、国家独自の神話に強い関心を抱くようになったと考えられる。即ち強力な異民族から生じる危惧の感は、檀君を民族共同の始祖と捉える国家アイデンティティーを誕生させ、自国を中国とは違う独自の神話基盤の上に成立するものと認識させるに至る。

十三世紀を境に高麗は高麗自身の中華思想の芽を見出し、以降その芽を大事に育てていくのである。

このような思想の誕生の前兆として十二世紀末には「英雄伝説」の性格が強い李奎報の『東明王篇』が書かれる。この書は『帝王韻記』のように「東国君王開国年代」「本朝君王世系年代」といった叙述態度を規範とし、檀君時代から高麗時代までを包含した民族の前歴史の重要事件を詠った物ではない。しかし、それまで幻鬼なものとして顧みられなかった「東明王」の伝説を神聖なものとして民族の説話に取り入れたところに大きな意味がある。李奎報は12世紀後半、国外的に金の抑圧に悩まされ、高句麗の創国の英雄である東明王に民族の抵抗意識の拠り所を見出したのであろう。

次節ではこの三書の性格を詳細に検証し、これらの書に顕れるものを通じて高麗が独自の主体性をどのように追求していったのかを模索する。

### 第三節 高麗の主体性模索

十二世紀後半から十三世紀にかけて高麗はそれまでになかった国家存立の危機にさらされる。宋を窮地に追い込み兄弟関係を結ぶまでに成長した女真族、また西洋にまでその名を轟かしたモンゴル族、この二国は韓半島にもその勢力を延ばし、高麗は大きな試練に直面することになる。このような実況は唐帝国を中心とした10世紀までの東アジア世界の秩序とは一線をなすものであり、高麗は自国の自我を守るべき新しい世界観を探索し始める。そこで注目されたものが隋・唐帝国に最後まで屈服しなかった高句麗の創国の英雄である東明王であった。だがこの東明王は英雄的存在ではあるが民族全体を包み込むには限界を持つ存在でもある。それは東明王が、高句麗の継承者であると自称する高麗人には創国の英雄であることが可能であるが、民族全体という視点から捉える場合、一部族の創始者であるに止まり民族共同の始祖では成り得ないからである。

このような部族的説話から脱却し民族共同の始祖を発見してそれに一つの系統を持たせるまでには、李奎報を経て李承休の誕生を待たなければならなかった。李承休の書いた『帝王韻紀』は檀君が朝鮮を開闢させ、風雲を啓導し新羅・高句麗・扶余・沃沮・穢貊などの南北各地に散在した部族集団の全ての始祖であるとしている。檀君を東方の全



種族の始祖として崇めることによって新羅・高句麗・沃沮・穢貊は無論のこと満州地方の渤海までも同族の一部として包含させるに成功したのである。

高麗は当時の書物を足場として主体性を見出し、自国の自我の拠り所として高句麗の東明王を再評価することから始めて、終には民族共通の始祖としての檀君神話にまでたどり着くようになる。ほとんど同時期に作成された『三国遺事』も檀君の存在を詠っているが、この書は新羅を中心に書き上げているため、高句麗に焦点を当てている『帝王韻紀』とは趣を異にしている。では次にこの二書の性質について詳細に検索し、はたして高麗時代において「東明王」及び「檀君」がどのような意味合いを持っていたのかを追求してゆくことにする。

### ①『東明王篇』

この本は李奎報が1193年に（高麗明宗23年）『旧三国史』を参考にして書いたものである。この書を書いた作家である李奎報は『高麗史』の列伝によると1168年から1241年までの時期を生きている。この時期は女真族の国、金国が強力な勢いを以って満州地方を制覇した時であり、中国の宋は遂に南に追い払われ1278年、元に滅ぼされるまで南宋として存続する時でもある。この時期の高麗では武人が政権を掌握しており、李奎報はその一人である崔忠献に見込まれて政界に進むことになる。

彼が『東明王篇』を書いたのは26歳の時であり、その時に参照した『旧三国史』は現在その名を留めているだけで現物は伝来されていない。その『旧三国史』の東明王本紀を注の形で本文に取り込んでいる『東明王篇』は『旧三国史』を窺い得る数少ない書でもあり、その面でもこの書の存在価値は計り知れないものがある。東明王の説話は中国にも広く知られている。事実李奎報は『東明王篇』の序において『魏書』と『通伝』を通じて「東明王神話」を接したとしている。彼が参考にした『魏書』には、東明王の生い立ちと高句麗を建設するまでの経緯が詳しく述べられている。彼は天帝の子である解慕漱を父とし河の王の娘である河伯を母とする神威な存在なのである。それまでにあまり顧みられなかった東明王の神話が脚光を浴びるに至った理由は前述したように、その時代の背景によるものであった。この詩を通じて高麗は自国が高句麗を継承する神聖な国であることを示す。それは高句麗がかつて遼東地方までをその勢力下に治めていた国であり、高麗は自国をその後裔に位置づけることによって、遼東地方の回復を試みることが出来たからであった。それに東明王を天帝の子孫としたのは、夷狄として軽んじてきた契丹と女真族が勢力を得、称帝していることに対する反動から起因するものであった。

韓半島にまで干涉の手を伸ばして来る彼らに高麗は神聖な国家であり、天帝の子孫が君臨している国家であることを『東明王篇』という叙事詩を通じて表明したと受け取れる。

「理気論」とは異なる、「建国神話」というものを通じて中国とも一線をなす自国の独自性を詠っている。

## ② 帝王韻紀

この書は『帝王韻記』の本文によると1287年、李承休によって生み出されたものである。李承休（1224年－1301年）が生きた時代は金国に変わって蒙古が猛威を振るった時期であり、対外的には元の政治的な干渉に悩まされ、対内的には附元勢力家達の横暴に悩まされるという国家の存立が危うい状態に置かれていた時期だった。

このような状況で書かれた『帝王韻紀』が示している世界観とはどのようなものだろうか。それを知るにはまず、この書の作者である李承休について考察してみる必要がある。『高麗史』列伝を見ると、彼は崔氏武臣政権の末期から蒙古支配初期の国内・国外的な激動の時期を生きている。彼が『帝王韻記』を書いたのは忠烈王14年の時で、この時代は国王が元の駙馬（元から后をもらい、その婿となること）となっていたため、国内では蒙古の風俗が蔓っていた。王自ら元の風俗に染まっており、当時元にいた忠烈王は自ら辮髪をし胡服を着用していた。李承休はそのような王の姿に我慢できず、蒙古の元宗に太子の服装を高麗のものに改めさせることを要求し元宗はその要求を認めたこともあった。このような情勢の中、高麗の自我を守っていくことは重大な課題であり、国家の危機に面しその被害を皮膚で感じていた李承休が書いた『帝王韻記』に、そのような性格が滲み出することは当然のことである。

『帝王韻記』は上・下の両巻に区分されており、上巻では中国歴代の帝王の興亡史を、下巻ではそれに相応する形で韓半島の帝王の興亡史を詠っている。

つまり上巻は序に続き盤古、三皇五帝、夏、殷、周、三代と秦、漢、魏、晋、宋、齊、梁、陳、隋、唐、五代、宋、金、元までの興起の歴史の要点を七言五詩の264句で詠っており、下巻は東国君王開国年代、本朝君王世系年代の二部に分かれており、一部では序に続き地理紀、檀君の前朝鮮、箕子の後朝鮮、衛滿の篡奪、三韓を継承した新羅、高句麗、百済の三国と後高句麗、後百済、渤海などの高麗への統合以前の歴史を七言古詩の264句1460言で語っている。そして二部では高麗の世系説話から忠烈王代までを語っている。

『帝王韻記』は『東明王篇』を受け継ぎ、それに反映された世界観を継承、発展させ蒙古の政治的干渉に対抗し、高麗の独自の世界を確立させようとする試みから書かれたものである。そのために『帝王韻記』では檀君を民族共通の始祖と捉え、高麗は他の国とは異なる共通の始祖を持つ民族だという団結意識を詠っている。

つまり高麗は遼東の別天地に存在していて他国とは厳然に区別される領域だということを強調している。『帝王韻記』の「地理紀」にこの意識が強く奏でられている。その本文を見ると下記のように記されている。

遼東別有一乾坤。斗与中朝区以分。洪涛万頃围三面。於北有陸鍊如線。  
中方千里是朝鮮。江山形勝名敷天。耕田鑿井礼儀家。華人題作小中華。

元の駙馬国としてしか国家の存立を守れなかった忠烈王の時代、李承休はこのように叙述詩を通じて高麗の主体性・独自性を詠った。そして、その拠り所として檀君神話を民族共通のものに発展させ一体意識を高め、また檀君起年を中国の堯帝のそれと同年視し（本文、前朝鮮紀）中国に対しても劣ることのない悠久さを強調している。

このような自主的世界観は朝鮮史に対する認識が三国以前には及ばず、三国の始祖までも中国系に連結させた『三国史記』とはだいぶ異なっており、高句麗の始祖である東明王だけを天に関連させた『東明王篇』よりも世界を広く捉えている。東扶余・北扶余・沸流国・新羅・高句麗・穢貊・南沃沮・北沃沮の全ての国が一つの血統で繋がっており、また天孫である檀君の後裔なのである。

民族の始祖を天と結び付け国家を神聖視することによって元に対抗できる民族の主体性を確保していったと見られる。そして『帝王韻記』で、もう一つ注目すべきところは『三国史記』では除外されていた渤海を高句麗の継承者として本文に取り入れたことである。高句麗が支配していた満州一帯を継承し独自の文化を花咲かせた渤海を同民族と認定することによって、現実的には不可能な領土回復の夢を叶えようとしたのかもしれない。

以上『帝王韻記』の性格を考察してきた。李承休は元にたいして直接、非難することが不可能であった忠烈王の時代、この叙事詩を通じて高麗の主体性・独自性を謳歌し元に対抗すべき民族意識を育てていこうとしたのである。そしてその方法として韓半島は中国とは断絶した遼東の一国であることを強調し、この地が民族共通の祖先である天孫檀君が支配していた神聖な国だということを主張した。『東明王篇』が金に対する国家の独自性を模索するために書かれたように、『帝王韻記』は押し寄せる元の勢力に対抗すべくして、また高麗の自我を守る国家意識を高める手段として世に生み出されたと考えられる。

## 第四節 結論

「竜谷図」に顕れる世界観、それは高麗時代の韓半島が以前の中国中心世界像から脱却し、自国を世界の中心に据えていることを示唆してくれる。それは自国が独自の神話の上に成立している神聖な国であるという自覚から起因しており、『東明王篇』・『帝王韻記』・『三国遺事』の三書がそのことをよく示している。「竜谷図」での韓半島の特徴、その大きさの誇張と「妙香山」の特記は、これらの思想を視覚的に表したものであり、この地図によって当時の世界観を一目で見渡すことができる。それまであまり重みを持って受け止められていなかった「東明王神話」・「檀君神話」が十二世紀から十三世紀にかけて重視されるようになった背景には、北方民族の興起に伴って崩れていく中国中心世界観に代わる新たな世界観が欲されたからであった。「東明王神話」から始まって、それ

を引き取るかたちで檀君神話にまで発展させた『三国遺事』（本書の王暦篇に叙述されている高句麗編の注に於いて朱蒙・東明王は檀君の子とされている）そして『三国遺事』では為し得なかった民族の系統化に注力した『帝王韻記』、これらの三書は北方民族の侵略に悩まされ、国家の自我を追求した十二・十三世紀において、その要求に対処すべきとして誕生した「神話」なのである。

かくして「檀君神話」によって檀君を韓半島の共通の始祖とし民族意識を高めることに努め、また檀君を帝釈と結び付け仏教信仰と原始信仰との融和を謀ることに効を奏したのである。このように十二・十三世紀において民族祖先として成長していった「檀君」の存在は1402年になって「竜谷図」に「妙香山」の特記という形で引き継がれていくことになる。

最初に述べたように「混一疆理歴代国都之図」の韓半島は実際より大きく描かれており、また「妙香山」だけを山型で記している。他の山が皆、線で表示されているのに何故「妙香山」だけが特別な形で表記されたのであろうか。それを知るにはこの地図の編纂を見守り、地図の下に跋文を書いた権近がどのような人物であり、彼にとっての「檀君」とは、どのような存在だったのかを知る必要がある。

権近は1352年に生まれ1409年まで生きており、この時期は高麗恭愍王の時代から朝鮮太宗の時代に該当する。彼が政権に入門したのは恭愍王18年の時であり、この時の国際状況は大きな変化を迎えようとしていた。100余年という長い間、勢力を東西に轟かせていた蒙古が自ら中国の文化を模倣し、その結果中華の文弱に染まり次第にその武力が衰退するに至ったのである。当時、王位に就いていた恭愍王はこの時勢に乗じて国権の回復を図り、失地の回収に努めた。恭愍王の時代はその初年から元朝の多年にわたる干渉・圧迫に対して反抗的民族意識が爆発した時であり、国内・国外状況は恭愍王の改革に相応しいものであった。

恭愍王はまず蒙古の制度と政治的干渉から脱却することを目指し、まず始めに蒙古の年号を撤廃しそれまで蒙古から諡号を貰っていた忠烈王・忠宣王・忠肅王・忠恵王・忠穆王に新たに景孝・宣孝・懿孝・献孝大王・顕孝大王という尊号を授けた。そして領土の回収に努め、1357年までには高宗以前の領域に回復させた。このように元からの独立に全てを費やしていた恭愍王の時代を生きた権近は自ら、どのような世界観を描いていたのであろうか。1370年、高麗は元の金印を返却し新たに新興国である明の年号である洪武を使用するようになる<sup>8)</sup>。

そして明に使臣を送り始めるが、1396年に権近がその使臣に選ばれ明に向かう。彼はそこで明の太祖である洪武帝に命じられて詩を制作することになる。この詩の内容は権近の文集である『陽村集』に載せられていて、その内容は以下のとおりである。

8) 『東国史略』、一山文庫、1971年、p.1。

命題十首（洪武29年9月15日）

始古開闢東夷主。昔坤人降檀木下人立以為主。因号檀君時唐堯元年戊辰也。

聞説鴻荒日 檀君降樹辺 位臨東国土 時在帝堯天  
伝世不知幾 曆年増過千 後來箕子代 同是号朝鮮<sup>9)</sup>

権近が明に使臣として送られ、王の前という公式的な場所で檀君について詩作したという事実は彼が普段から檀君に特別な価値を付与し認識していたということを現す。それに檀君起年を中国の堯時代と同年視しており、この事実から彼の檀君観が高麗時代の『帝王韻記』・『三国遺事』を引き継いでいるものだということがわかる。つまり檀君神話は民族の独自の発端を示すものとして生き続けており、朝鮮は中国とは異なる天下の下に成り立っていることを明かす役割を果たしている。権近はこの詩を通じて仮に明の年号を使用しているも朝鮮は中国に劣らず神聖な国であること主張したかったのではないか。明で檀君神話を詠った権近がその6年後の1402年に制作される「混一疆理歴代国土之図」の編纂に関わり、その地図に檀君と関連深い「妙香山」が記されたことは何を示唆するのであろうか。

彼が詠った詩には「妙香山」という表記が明記されていないけれど、彼の孫である権肇が彼の詩に附した注には、その表記が表われる。その注で、彼は祖父にあたる権近の詩で檀君が降臨したとされる場所が「妙香山」であることを明らかにし、また夫妻を檀君の子孫と明記することによって檀君朝鮮と扶余、高句麗を同血統に結び付けている。

「混一疆理歴代国都之図」は、今までそのヨーロッパの部と日本の部については多くの研究がなされてきたが、その韓半島の部についてはそれ程注目されてこなかった。また研究があっても、現在の視点で評価され、その時代の世界観というものが地図にどのように示されているのか、つまり朝鮮が中国と離れたところで自国確証を如何のように成立していったのかを「混一疆理歴代国都之図」を通じて読み取るという試みはされてこなかった。そのため、韓半島の大きさが誇張された理由、檀君の降臨地である妙香山が特記された理由が正しく理解されてこなかったが、今までの検証を通じてこれらの特徴が顕わしているものが朝鮮初の韓半島の自国認識であることが明らかになった。

9) 権近『陽村集』、朝鮮史編集会編、1937年。

## 【参考文献】

- 『高麗史』、古典研究室編集、卷一 世家。  
権近『陽村集』、朝鮮史編集会編、1937年。  
『東国史略』、一山文庫、1971年、p.1。  
一然著、李民樹訳『三国遺事』乙酉文化社、1985年、p.222。  
金富軾・李平燾訳注『三国史記』、乙酉文化社、1996年、卷12・卷22・卷28。  
鄭玉子『韓国史特議』ソウル大学出版、1990年、p.360。  
李燦『韓国の古地図』、凡友社、1991年、p.29。  
李奎報・李承休著、朴斗抱訳『東明王篇・帝王韻記』、乙酉文化社、1996年、p.187。
- 小川琢治『支那歴史地理研究』、弘文堂書房、1928年、p.6。  
『大阪学芸大学紀要』6号、1958年。  
秋岡武次郎『日本地図作成史』鹿島研究所出版社、1971年、p.178。

## 要 旨

「混一疆理歴代国都之図」は1402年（朝鮮太宗2年）に制作されたものであり、かつて中国を世界の中心と捉えその他の国を皆夷狄視していた頃とは異なった目で世界を見ていることが分かる。世界に対する視野が広く西洋までにも開けており、その中で韓半島を位置づけている。ここで注目すべきことは韓半島が他の国と比べ実際より誇張され大きく描かれ、そうすることによって自国がどの国にも勝る大国であることを強調していることである。

また「妙香山」だけを他の山とは違う方法で表記している。他の山は、ただ線をジグザグに走らせているだけだが、「妙香山」だけは山形で記している。それは何を意味するのか。この山は朝鮮の建国神話の舞台として有名なだけでなく朝鮮の祖先である檀君の誕生地であることが分かる。それまであまり重要視されなかった「東明王神話」・「檀君神話」が十二世紀から十三世紀にかけて重視されるようになった背景には、北方民族の興起と伴って崩れていく中国中心世界観に代わる新たな世界観が欲されたからであった。「東明王神話」から始まって、それを引き取るかたちで檀君神話にまで発展させた『三国遺事』、そして民族の系統化に注力した『東明王篇』・『帝王韻記』、これらの三書は北方民族の侵略に悩まされ、国家の自我を追求した十二・十三世紀において、その要求に対処すべきとして誕生した「神話」なのである。

このように十二・十三世紀において民族祖先として成長していった「檀君」の存在は1402年になって「竜谷図」に「妙香山」の特記という形で引き継がれていくことになる。「混一疆理歴代国都之図」は、今までそのヨーロッパの部と日本の部については多くの研究がなされてきたが、その韓半島の部についてはそれ程注目されてこなかった。しかし、以上の考察からこの地図が目指したものが、自国中心の世界観であったことがわかる。

キーワード： 「混一疆理歴代国都之図」、妙香山、檀君神話、自国中心世界観  
東明王神話、権近、権寧

투 고 : 2009. 2. 28  
1차 심사 : 2009. 3. 14  
2차 심사 : 2009. 3. 28

「混一疆理歷代国都之図」

